

【森のお話】

…コラム…

「文献から広葉樹林化を考える」

森林総合研究所東北支所 地域研究監 新山 馨

森林総合研究所 森林昆虫領域 小川 みふゆ

「広葉樹林化」というキーワードが、新たな森林・林業基本計画と、それに伴う新たな林業政策の中で出てきました。単純に言えば、針葉樹人工林を再び広葉樹林に戻すことを「広葉樹林化」と呼んでいます。

背景にはスギ花粉症や行き過ぎた針葉樹人工林化への批判、各県での環境税導入の動きがあります。広葉樹林化は、間伐手遅れ林分を強度に抜き切りし、税金を投入してでも広葉樹の混交を計り、水土保全や生物多様性保全機能など、森林の多面的機能を維持したいという各県の姿勢の表れでもあります。一方、「広葉樹林化」に対する批判や不安もあることも事実です。人工林化した林分をなぜ広葉樹に戻さなければならぬのか、本当に広葉樹林化できるのか、専門家でなくても疑問がわき上がります。ここでは先入観を持たずに広

く文献検索を行い、これまで行われてきた広葉樹林育成に関連する様々な文献数の変遷を通じて「広葉樹林化」の新たな視点を整理することにしました。

検索には、タイトル、著者名、キーワードなどから文献を検索することが出来る、森林総合研究所が所蔵する文献を検索するシステムで、「林業・林産関係国内文献データベース」(以下FOLIS)を用いました。FOLISの収録誌は国内誌が中心で、検索に使ったデータは一九七八年から二〇〇六年の文献です。検索するキーワードは「広葉樹」を主として、その他のキーワードとの組み合わせで行いました。

結果として、文献数からみた広葉樹に関する研究には明らかに流行り廃りがあり、「広葉樹施業」や「天然林施業」が廃れる一方で、最近では

「多様性」などの論文が増えてきていることが判りました(下図)。それに対し、「不成績造林地」や「間伐」などのキーワードはいくつかのピークを示しながら、一九八〇年代以降とされることなく文献が発表されています。「広葉樹林化」そのものを題名に含む文献はなく、ヒットした文献は、広葉樹林施業や針葉樹人工林施業での不成績造林地問題など、広葉樹に関わる内容を広範囲に含むものでした。

キーワードの変遷からも明らかのように、文献数は施業や森林管理の時代性を表しています。拡大造林時代には、ブナの天然更新などの更新問題が目立ち、その後には不成績造林地の問題が編著

に現れてきています。特に高標高地、多雪地、ササ密生地など、様々な要因で造林木の成長が不良になり、不成績造林地になったところは広葉樹の侵入が多く、結果として文献数が多くなっています。ある意味、拡

大造林は広葉樹林の更新ポテンシャルを試した実験とも解釈できます。また人工林として成林したところも、実は下刈りや除伐で広葉樹林化を防いでいただけとも解釈できます。広葉樹林化は、天然林施業、長伐期施業、複層林、従来通りの人工林施業など、多様な施業の中の一つに過ぎません。どのような林分で広葉樹林化を行うのか(事前評価)や、経過の検証、失敗した場合の対応手段を事前に準備しておく必要があります。

今後も広葉樹林化の様々なキーワードが時代と共にどのように移り変わるのか見守りながら、研究を進めていきたいと思います。

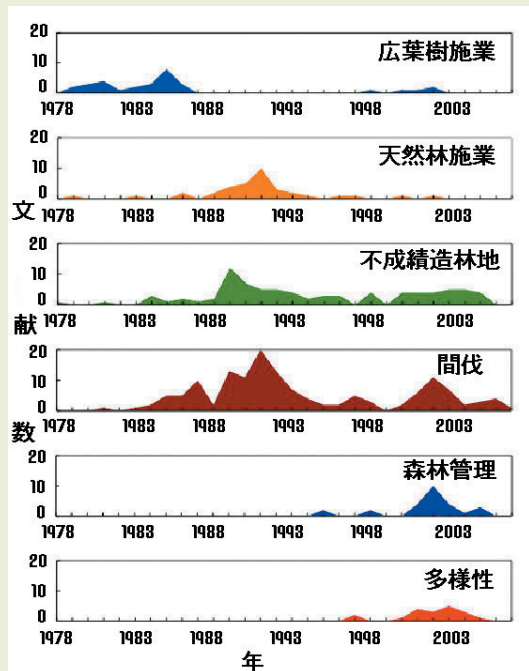


図 文献キーワードの年代別変遷